

## 巻頭言

2023年の国際マンガ研究センター(以下、IMRC)の活動を振り返ると、コロナ禍が終息したことで、グローバルな対面による活動が本格化した1年であった。国際学術会議の開催から、海外からのマンガ家の招聘、海外マンガフェスティバルの訪問など、枚挙に暇がなく、IMRCの活動は真にグローバルであると恐縮ながらも自負している。「日本のマンガは海外で人気」という言説は、25年ほど前から報道、政策、各界で唱えられてきた。しかしながら、通常「海外」と聞いて思い浮かべる国々や地域は、経済活動や人的交流の多さからの必然もあり、欧米やアジアに偏りがちではないだろうか。私はIMRCの業務に携わるようになってから、「海外」や「グローバル」という言葉のイメージが広がった。それは、IMRCの活動を通じてマンガの国際的な豊かさに接することにより、グローバル性やその表現の普遍性をより深く理解するようになったからであろう。

例えば、今年は「アフリカマンガ展」という大規模な企画展示を京都新聞との共催により、外務省の後援と日本万国博覧会記念基金の助成を頂いて開催した。この展示では、アフリカ人作家によるフランス・ベルギーのバンド・デシネの影響を受けた作品群と、日本のマンガスタイルで描かれた作品の数々を紹介した。本展示は、日本、米国、フランス・ベルギーといった一般に思い浮かぶマンガの制作国だけではなく、アフリカを含む世界中において、マンガが制作されて、読み親しまれて、愛されていることを示した貴重な機会であった。

そして、毎年、安齋科学・平和研究所・立命館大学国際平和ミュージアム・京都国際マンガミュージアムとの共催により、オンライン上で実施してきた「マンガパンデミックWeb展」においては、今年も多くの国・地域からプロ・アマを問わない作品が寄せられた。欧米、アジアに留まらず、アラブ、中南米、オセアニアまで50ヶ国以上の国と地域からの参加があった。さらには、5年ぶりに対面で国際学術会議「メカデミア」を開催し、京都に世界中から研究者が参集した。このようなIMRCの活動は、マンガが表現、エンターテインメント、研究対象として、グローバルで壮大な存在であることの現れであろう。

2023年は、マンガを通じて、グローバルの広範さだけではなく、人類と技術の関係についても、深く考えさせられた一年であった。きっかけとなったのは、画像生成AIによるマンガの創作支援の本格化である。18世紀からの第一次産業革命に代表されるように、技術の進歩と普及は、私達の生活様式を大きく変容させてきた。20世紀後半の第三次産業革命においては社会の情報化が進み、マンガ制作においてもデジタル技術の利用が始まり、次第に主流となった。ウェブトゥーンの誕生などマンガの表現形式も多様化して、現在は電子コミック

の約1割を占めるまでに人気となった(株式会社インプレス、『電子書籍ビジネス調査報告書2023』より)。そして、21世紀に入ってからの第四次産業革命の勢いは、マンガにも及んでいる。それは、先にも述べたAI技術によるマンガの創作支援である。2023年は、画像生成AIソフトを活用した作品が単行本として出版されたり、名作の新作においてアイデアや作画にAIを活用したなど、AIを用いた新しい試みが、一般ニュースでも取り上げられ、マンガ業界だけではなく、広く注目を集めた。

現在のマンガにおいては、AIは創作支援に用いている試行段階にあり、プロは面倒な作業や新しいアイデアを求めるツールとして、アマは絵が得意でない人のツールとして使いこなし始めたといったところであろうか。これらは、人間の役割を補完、代替する手段としての利用に留まっている。ある技術は広く一般に普及すると、効率性、経済性、利便性であるといった当初の開発目的としての利用だけでは留まらない、何らかの質的な変革をもたらすことが多い。例えば古くは、馬車の便利な代替手段として自動車という技術は開発されたが、普及すると代替手段としての利用のみでなく、都市計画といった私達の生活に、大きな質的な変革をもたらした。デジタル技術の普及によるウェブトーンの誕生も然りである。AI技術もさらなる普及が進むと、マンガにどのような変革をもたらすのだろうか、マンガの発展に期待したい。

AIという技術に人類はどう向き合うべきなのか、現代における肝要な課題である。人類自身に何ができて、どの部分をAIに任せるのか、さらには人間にはできずAIにできることは何かという思考が求められ、人類とは何かという再考が求められる。将来的には果たして、人類を超えるクリエイティブな能力を持つAIは生まれるのだろうか。また、AIのさらなる利活用を進めるためには、著作権といった文化の発展や社会秩序のために私達がこれまでに構築してきた制度の見直しも必要である。現在のAIによるマンガ制作は、人類が技術とどう対峙していくべきなのかという本質的で重要な疑問を投げかける。(ちなみに、本文章もAIによる校正を行っている。その実力や、いかに!?)

来年も引き続き、私たちの生活を豊かにしてくれるマンガについて、社会の変化を踏まえつつも、その変化に捉われない本質について探求していきたい。